

巻頭言

天心・岡倉覚三と五浦

— イギリス・ロマン主義特輯号の余白に —

稲賀 繁美

一 五浦 (いづら・いっ・みり)

五浦といえは、茨城県も県北の景勝の地だが、天心・岡倉覚三(一八六二—一九一三年)が日本美術院を移転させた場所として今に記憶される。海岸には太湖石と組成も近い多孔性の奇岩が露呈しており、その入り江を一目見るや、岡倉は讚嘆の声をあげ、即日土地を購入しようとする勢いだつたという。当時、平までは鉄道が敷設されていたとはいえ、どうしてこのような辺鄙な土地が岡倉の目に留まったのだろう。まず太湖石といえは、中国庭園ではもつとも珍重された素材である。蘇州の庭園群は近隣の太湖の湖底からこの石材を採取して造園された。五浦ではそれが天然のまま海中から姿を覗かせ、岡倉が選んだ地所は、海拔十メートルを超す断崖を成し、眼下の淵には白波の碎ける絶景が広がる。いまさら庭を造成せずとも、この断崖の突端に家屋を設ければ、それで自然のままの中国庭園を満喫でき

た。その彼方には太平洋が広がり、水平線の向こうには北米合衆国が位置している。野に下つて後の晩年十年間、岡倉は北米東岸のボストンとこの五浦とを往復することで生計を立てることになる。

ボストンでの月給は二百五十ドル、当時の換算で五百円ほど。岡倉は爆薬で岩を破碎するなどの大工事を敢行したという。一見無軌道な散財にも見えるが、母屋の建設費はたかだか七百五十円ほどだったというから、懐具合からみても、十分に賄える金額であった。

岡倉がこの地に白羽の矢を立てたのは、最初のインド滞在から戻つてすぐのことだった。かの地で親交を結んだ、ヒンドゥー近代化の旗手、ヴィヴェーカーナンダ Swami Vivekananda (ベンガル音ではビベカノンド Shami Bhekanondo、一八六三—一九〇二年)が僧院を営んだベルール Bevelも、首都カルカッタ(現コルカタ)からほどよく離れた辺鄙な場所だった。ガンジス河の支流、フーグリー Hooghly 河に面した川岸には、沐浴のためのガートが設けられていた。清水恵美子氏(一九六二年生)は、岡倉が五浦の海岸に設けた人造の石垣も、このインド体験を生かそうとしたものではないかとの仮説を述べておられる。¹⁾またインド亜大陸最南端のコモリン岬の名は、ヒンドゥー教の聖地、カンニヤークマリ Kanyakumari に由来する。修行時代のヴィヴェーカーナンダがこの地で、海岸から隔たった岩礁のうえで瞑想し、北米行きの靈感を得た、とは聖者傳ほか繰り返して語る逸

話である。⁽³⁾岡倉もまたその噂を耳にしたことがあったかもしれない。五浦には岡倉のインド体験や伝聞を反復するに足るだけの立地条件が備わっていた。

彼の帰国後ほどなくインドに派遣されることとなる横山大観(本名は秀鷹 一八六八―一九五八年)と菱田春草(本名は三男海 一八七四―一九二二年)は、ティピラ藩王国での壁画制作を予定していたが、この企画は官憲の妨害で遂行不能となる。紆余曲折のち彼らが世話になるラビンドラナータ・タゴール Rabindranath Tagore (ベンガル音ではロビンドロナト・タクル Rabindranath Thakur 一八六一―一九四二年)もまたベンガル西方のシャンチニケントン Santiniketan に広大な土地を購入し、そこに将来への理想を傾けた学園都市の建設に着手しつづあつた。タゴールと岡倉に関する研究書を上梓した演劇研究者・文化理論家のルストム・バルーチャ Rustom Bhavcha (一九五三年生)は、はじめて五浦を訪れたおり、そこがあまりにシャンチニケントンによく似ているので驚いたという。⁽⁴⁾当時、鉄道を降りた訪問者は人力車で海岸まで移動したそうだが、シャンチニケントンでは今日なお、駅から学園への道のりはリクシャによつて送り迎えされ、その道中には長閑なベンガルの田園風景が広がる。五浦への移転を東京の口さがない新聞は「都落ち」などと嘲し立てたが、そこにはおよそ日本列島の尺度や寸法では通用しない、岡倉の思想や行動を容れるだけの自然環境があつた。

二 釣り

ボストンでの勤務から五浦に戻った岡倉の日記は、もつぱら釣りだったという。崖のうえの新居は、観浦楼を移築して屋外に風呂場を設けたものだったが、妻の基子の回想によれば、崖のうえのこの家で毎晩釣り道具の工夫をしては、舟のうえで読む本を物色して翌朝に備えるのを常にしていた、という。⁽⁵⁾それでは釣りとはいかにして何だったのだろうか。

岡倉とは表向きなんの関係もない文脈ながら、竹山道雄(一九〇三―一八四年)は極東の藝術をドイツ語で論じた際に、こんな比喩を展開している。「釣をしている人は退屈しません。釣人は空虚な空間の中に獨坐しています。しかし浮標に心を集中して絶えず期待のために緊張しているとき、その人にとつて時間は充實しており、空間のむなしさが克服されます」。⁽⁶⁾おそらくは五浦の沖に舟を出し、悠々と釣りに勤しみ、午睡を貪り、読書に耽つた岡倉の境地は、ここに竹山が描いた「空虚な空間の中に獨坐」する道士の姿からも、さほど離れてはいなかったことだろう。

この五浦時代の寛三の釣姿には、六角紫水(旧姓は藤岡、本名は津多良 一八六七―一九五〇年)が撮影した有名な写真が知られる。長い釣り竿と魚籠を手にした岡倉は、なぜか羊の毛皮を蓑として纏っている。小泉晋弥氏(一九五三年生)がすでに指摘するとおり、これは巖子陵(名は光。前三九一後四

一年)の故事に倣つたものだった。⁽⁷⁾幼馴染だった後漢の光武帝(劉秀。在位二五―五七年)から宮仕えの徳愷があつたのに、これを峻拒した子陵は、余生を釣り(意味)に過ごしたという。同じ姿は平櫛田中(本名は俣太郎。一八七二―一九七九年)が『五浦釣人』の木彫にも刻んでいる。釣りはけつして唯の有閑の暇潰しなどではない。自己を無にして浮標に魂を預け、その浮沈に同化して初めて、釣人は水底の生命と会話を交わすこともできる。その無我の境地を養うことが目的であり、しかもそれは、微小な一点に自らを還元して波間に揺蕩うことで、時間の制約を離れ、空と海との出会う広大なる空間に包含される体験でもある。将来のどこかに理想の実現を目指すのではない。むしろひたすら今の一瞬に沈潜することにこそ、無限と一体となる秘訣も存する。

『茶の本』The Book of Tea (一九〇六年)の第三章「道教と禪」Faism and Zenism に岡倉は、『莊子』から引用していた。莊子が河の傍で魚が楽しく泳いでいる様に感嘆する。すると友人が「魚でもない癖に、どうして魚が楽しんでると分かる」と訝る。これに莊子はこう返した。「君こそ僕ではないのに、どうして魚が楽しんでるのが僕には分からない、と君には分かるのだ」と。⁽⁸⁾その魚の境地に探りを入れるのが釣りの愉しみであり、岡倉は魚を獲つて持ち帰る代わりに、そのまま放すことも多かつたといひ伝える。

若き日に私淑した「羅華樹先生」すなわちジョン・ラフアー ジュ John LaFarge (一八三五一―一九一〇年)の言葉として、

岡倉はこうも伝える。「美術ノ波力打寄セテ岸ヲ洗フ濱邊ハ人ノ知ラヌ處ニアリ」。⁽⁹⁾これを敷衍した表現が『東洋の理想』The Ideals of the East (一九〇三年)のなかにもあつたはずだ。「東洋の思想の途切れない波のひとつひとつが、日本の国民意識にひたひたと打つたびに波紋を残した砂浜」the beach where each successive wave of Eastern thought has left its sand-ripple as it beat against the national consciousness されが「日本の美術の歴史」[the history of Japanese artだ、というあの認識である。⁽¹⁰⁾ちなみに『茶の本』の第三章には、「こんな一節もあつた。「道(Tao)とは小径(Path)であるというよりは、むしろ通過のなか(In the Passage)にこそ存するものだ」」⁽¹¹⁾そうした思念は、あるいは五浦で潮騒に包まれ、釣舟に揺られるなかでこそ、ゆつくりと醸成された悟りでもあつただろう。釣りがもたらす思索はまた、瞑想の刻でもあつた。そしてまた五浦の邸宅を包む自然は、遺作となつたオペラ台本『白狐』White Fox (一九二三年)の終局にも窺っている。人間界から畜生の世界へと戻るコルハ(白狐)の耳に響いた松籟の音、そして波の音とは、観浦楼の松林を過ぎる海風と、眼下の磯に碎ける潮騒の変奏にほかならなかつたのだから。⁽¹²⁾

三 六角堂と双龍の松と

岡倉の住居から磯に下る岬の突端には、六角堂が設営された。二〇一一年の東日本大震災の折にはここにも大津波

が押し寄せ、津波は岡倉邸の縁側の途中まで達し、波高は十・二メートルを計測した。岡倉家の住居で唯一現存している邸宅は辛くも流出を免れたが、六角堂は土台だけを残して、跡かたもなく海に没われた。熊田由美子氏（一九四八年生）の研究によれば、⁽¹²⁾これは草堂で詩想を育み、釣りを楽しんだ杜甫（七二七〇年）の故事に倣ったものであり、建築は親鸞（一一七三―一二六二年）が夢のお告げを受けた京都の紫雲山頂法寺の六角堂に範を取ったものと推定されている。中央に炬を切り、茶室としても使える趣向であり、屋根の頂上には如意宝珠を据えて、仏殿の装いも兼ね備えている。

この六角堂の下の岩角には、双龍が玉を争う姿の老松があり、釣舟はその間から沖釣りに出立したという。ここでも清水恵美子氏が慧眼にも指摘する通り、⁽¹³⁾この双龍の松は『茶の本』第一章「人情の碗」The Cup of Humanityにも登場する。東洋と西洋とは、騒乱の海に翻弄される双龍のように、生命の珠玉を取り戻そうと空しく抗う。この大災厄を修復するには再び女媧の到来をまたねばならない。アヴァターの再来が待たれる、と。“avatar”とはヒンドゥー教でいうヴィシヌヌ神の化身のこと。岡倉は『茶の本』冒頭でシスター・ニヴェイタ Sister Nivedita（本名 Margaret E. Noble、一八六七―一九一一年）の『インド生活の経緯』The Web of Indian Life（一九〇四年）に言及するが、そこに引用される『バガヴァッド・ギーター』Bhagavadgītāの唱句が

岡倉の念頭にはあつたはずだ。曰く「善を護るため、悪を滅ぼすため、民族の正義を確立するため、私は時代から時代へと、何度となく再来し、出現する」I manifest myself. For the protection of the good, for the destruction of the evil, for the firm establishment of the national righteousness, I am born again and again（強調は原文）⁽¹⁴⁾と。それは輪廻転生の思想とも融合し、覚三はそうした回天の摂理、生々流転して止まない生命の流れに「道」を見定め、変幻するその姿を龍や女媧と呼ばれる空想裡の生物に託していた。

『双龍奪珠』の図は、横山大観による絹本彩色が、大観記念館に一点、イザベラ・ステュワート・ガードナー Isabella Stewart Gardner（一八四〇―一九二四年）旧蔵のものが一点知られる。直接には日露戦争を反映した東西闘争の寓意と推測できるが、岡倉が一九〇二年に後にしたインド、就中ベングアルでは、この化身の再来にインドの国民主義的な理想を託し、大英帝国からの独立を希求する機運が、スワデーシー（swadeshi）運動として勃興しようとしていた。他ならぬシスター・ニヴェイタの著作は、ヒンドゥー近代化の宗教改革がそうした政治運動と踵を接していた現実を代弁してもいた。

岡倉が日本での開催を画策した第二回世界宗教議会は、ヴィヴェーカーナンダが一九〇二年七月に三十八歳で逝去したことを主たる要因に、実現をみないままに瓦解する。その失敗に至る経緯は、岡本佳子氏（一九七一年生）の丹念な

一次資料発掘で、近年明確な輪郭をもって浮かび上がるに至っている。⁽¹⁵⁾その渦中の岡倉の著述としては「我らはひとつ」We are oneと仮に題された英文草稿が、第一回インド滞在中の執筆と推定され、⁽¹⁶⁾ここにはもつとも鮮烈に彼のインド知識人との連帯が謳われている。だがこの独立運動・暴力革命教唆の檄文は、ニヴェイタがジョセフィン・マクラウド Josephine Macleod（一九五八―一九四九年）宛書簡でも打ち明けるとおり、⁽¹⁷⁾外部に漏れれば関係者一同「牢獄行き」になりかねぬ危険文書だった。ましてや一九〇二年に日英同盟が成立すると、もはやこれを英文で刊行することなど問題外となる。草稿が岡倉の筐底に沈んだまま、一九三八年ころ孫の古志郎（一九二二―二〇〇一年）によって発見されるまで忘却されていたのも、いわば当然の成り行きであった。これがまず長男・一雄（一八八一―一九四三年）と古志郎により『理想の再建』として河出書房より和訳刊行され、ついで一九三九年、左翼運動から転向した浅野晃（一九〇一―一九〇年）により『東洋の覚醒』と改題されて聖文閣版『岡倉天心全集』第二巻に収められる。一般に『The Awakening of the East』として知られるが、これは浅野晃校訂により一九四〇年六月、聖文閣出版の英語版に採用された、後付けの題名に過ぎない。

四 五浦即時

様々な蹉跎の末、五浦に本拠を置く覚悟を決めた折に、

岡倉は「五浦即時」と題する詩を残した。日露戦争終結も間近な、明治三十八（一九〇五）年晩夏頃かと推定される。

蟬雨緑露松一邨 蟬雨 緑に露う 松 一邨
 鷗雲白掠水乾坤 鷗雲 白く掠む 水 乾坤
 名山斯處托詩骨 名山 斯處 詩骨を托す
 滄海爲誰招月魂 滄海 誰が為に 月魂を招く⁽¹⁸⁾

五浦の地で歴史に残る「中秋観月園遊会」が催されたのは、二年後の明治四十（一九〇七）年九月二十二日。第一回文部省美術展覧会の開催が目前に迫った時期のことであった。岡倉の脳裏には、この地に生をうけた画家・雪村周継（二五〇四年頃―？）の姿とともに、ベングアルの地に漂泊する放浪詩人パウル（Paul）の吟遊の様も、月下にありありと過ぎっていたに相違ない。

[注]

(1) 清水恵美子『五浦の岡倉天心と日本美術院』茨城大学五浦美術文化研究所・五浦歴史叢書6、岩田書院、二〇一三年四月、九二―九五頁。
 (2) スワミー・ニキラーナンダ協会『スワミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯』日本ヴェーダーナタ協会、二〇一一年五月、一一―一五頁。
 清水前掲書、九四―九五頁。ヴィヴェーカーナンダ生誕百五十年記念式典の際、二〇一四年三月二十六日に東京の在日インド大使館インディア・カルチュラル・センター（ICC）で上映された映画作品（Movie on Swami Vivekananda）の同様の伝承に基づいて構成されていた。
 (3) Rustom Bharucha, Another Asia: Rabindranath Tagore & Okakura

- Teashin, New Delhi and Oxford: Oxford University Press, 2006. ただし*
 (3)は、バルーチャ氏より筆者が直接伺った証言。
- (4) 岡倉基子「晩年の日常生活」、『天心先生歐文著書抄譯』日本美術院、一九二二年八月、二九―三〇頁。
- (5) アルベルト・タイレ/片山敏彦譯「西歐からみた禪藝術——東洋美術の「空無」」、『藝術新潮』第八卷六號、一九五七年六月、一二七―二八頁に引かれた竹山の論考。なお片山訳以外には、和文ではこの竹山のドイツ語原稿は公表されていない。関連する文章として、右の翻訳冒頭に掲載された竹山道雄「タイレのこと」(のち、「タイレのこと——アルベルト・タイレ」西歐から見た禪芸術「序」として、平川祐弘編『竹山道雄セレクション』田「美の旅人」、藤原書店、二〇一七年五月、三七―五八頁所収)がある。
- (6) 小泉晋弥「天心にとつての五浦」、東京藝術大学創立二〇周年 岡倉天心展記念シンポジウム『いま天心を語る』東京藝術大学出版会、二〇一〇年三月、一六五―一六七頁。
- (7) Kazuo Okakura, *The Book of Tea*, New York: Dover Publishers, 1964, p. 27 『莊子』秋水篇十七「莊子曰わく、鱸魚出で遊びて徒容たり。是れ魚の楽しみなり」と。恵子曰わく、「子は魚に非ず。安くんぞ魚の楽しみを知らんや」と。莊子曰わく、「子は我に非ず。安くんぞ我の魚の楽しみを知らんや」と。「森三樹三郎訳、小川環樹責任編集『老子・莊子』世界の名著4、中央公論社、一九七八年七月、三九―八頁)。
- (8) 岡倉覺三「美育ニ關スル注意」『教育評論』第二號、一八八八年十月、四頁(論文冒頭の署名は「天心子」。この文献の存在については、吉田千鶴子『日本美術』の発見——岡倉天心がめざしたもの(『歴史文化ライブラリー』37、吉川弘文館、二〇一一年四月、六八―七三頁)参照。また、清水恵美子前掲書、二五頁にも言及あり。
- (9) Kazuo Okakura, *The Ideals of the East, with Special Reference to the Art of Japan*, Berkeley, California: Stone Bridge Press / Tokyo: IBC Publishing, 2007, p. 13.
- (10) *The Book of Tea*, p. 20: The Tao is in the Passage rather than the Path.
- (11) 木下順二訳「白狐」岡倉天心全集『第一卷(東洋の理想 その他)』平凡社、一九八〇年二月、第三幕(三六〇―七八頁)。なお、本文での記述は、「茨城大学国際岡倉天心シンポジウム二〇一六」の一環として、同年九月四日に五浦観光ホテル別館大観荘で公演された「天心オペラ『白狐』(平井秀明構成)の演出および科白に基づいたため、木下訳とは必ずしも一致しない。
- (12) 熊田由美子「天心と六角堂——中国建築体験を中心に着想源をさぐる」『五浦論叢』第五号、茨城大学五浦美術研究所、一九九八年十一月、一〇四―一〇六頁。
- (13) 清水前掲書、九七―九八頁、一四六頁。
- (14) Sister Nivedita, "The Web of Indian Life," in *The Complete Works of Sister Nivedita: Birth Centenary Publication*, Vol. 2, Calcutta: Ramakrishna Sarada Mission / Sister Nivedita Girl's School, 1972, pp. 140, 243. 上村勝彦訳「バガヴァッド・ギーター」(岩波文庫、一九九二年三月)、五一頁(第四章第八節)は「善人を救うため、悪人を滅ぼすため、美德を確立するために、私は世期ごとに出現する。なお、ここに引いたニヴェイタの解釈が、当時のベンガルの政治状況を反映した恣意的な訳であることは、稲賀『絵画の臨界——近代東アジア美術史の権椏と命運』(名古屋大学出版会、二〇一四年一月)一九九―二〇〇頁ほかに指摘した。
- (15) 岡本佳子「ベンガルの民族主義と天心岡倉覺三——「アジア」が内包する文化的ナショナルイズムの拮抗」岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二『岡倉天心 思想と行動』吉川弘文館、二〇一三年七月、一〇〇―一六〇頁(第三章)。
- (16) *Letters of Sister Nivedita*, Collected and Edited by Sankari Prasad Basu, Assisted by Binmal Kumar Ghosh, Calcutta: Nababharat Publishers, 1982, Vol. 1, p. 494 (Letter No. 201, 14 Aug. 1902).
- (17) 岡倉天心全集「第七卷(書簡II・詩)」、一九八一年一月、三三八頁(原文)、五〇三頁(漢詩文註解)。訓み下しは竹内実訳注によるが、引用に際しルビは適宜省略した。初出は日本美術院の機関誌『日本美術』第七十九號(一九〇五年八月)、三頁。署名は「天心」、総題は「涅槃餘情」とし、漢詩の標題「五浦即事」の「即」の文字には新字体を使用。